



SINCE 2011



時代とともに変わっていく、供養の形式の新たな形をご案内します。

この供養の形を、ご寺院にお伝えしたい。

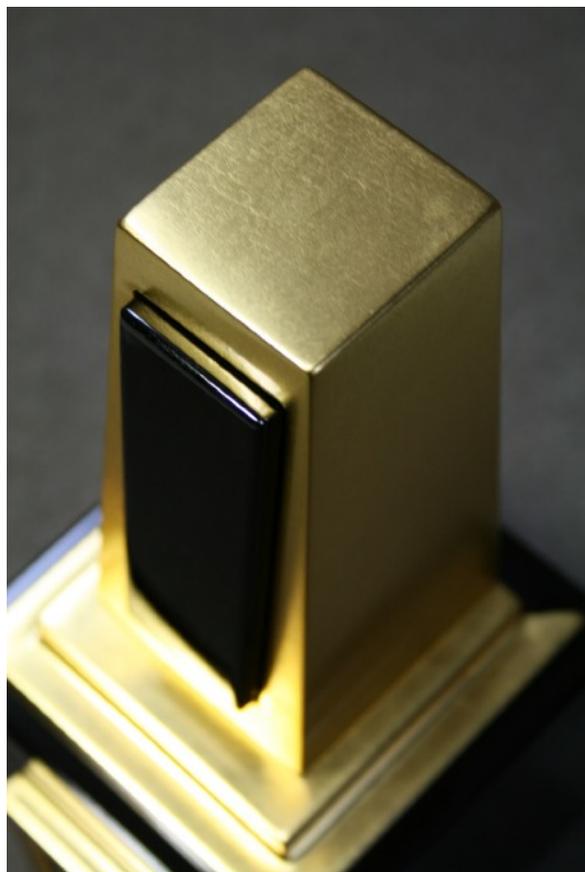


はじめに

寺院用仏具の企画・製造・販売に長きに渡り携わらせて頂き、その中で、近年ご寺院様の環境が大きく変化してきているのではと思っております。葬儀や納骨の方法も多様化し、それに伴い、一般の方々の仏事に対する考え方や感じ方も変化してきていると肌で感じるようになりました。そうしたことから、熟慮に熟慮を重ねて「新たな供養・納骨の方策」を考えました。本書で、ご提案します常楽塔というお仏具はまさに私共が心血を注ぎ考え作り出したお仏具です。今後の貴院の運営に少しでもお役に立つことが出来れば、これに勝る喜びはございません。是非お目を通して頂ければ幸いです。

何卒よろしくお願い致します。

有限会社 京都唯心庵
代表取締役 山田 富美男



供養が難しくなってきた時代背景

ずっと過去に遡れば、日本では家という形態が生活の基本単位であり、墓地の継承も家を単位に行われてきました。明治憲法では墓の相続は長男の権利となっていて、大家族の中から家の相続人が選ばれていたのです。どこの家族でも子供は多く、3世帯同居はごく当たり前の家族の姿でした。そうした中で祖父母が亡くなれば、子供たちや孫たちが家をあげて悲しみに暮れ、家長が葬儀の主体となって、菩提寺や近隣の人と執り行うのが通常の葬儀でした。供養を家中で繋いでいく時代だったので

それが昨今ではどうでしょうか？

墓を継承するどころか、遺骨の行く所さえ見つからないことがあります。電車の荷物棚に骨つぼが置かれていたり、コインロッカーに放置されたり、たとえ自宅に置かれていたとしても、これからどうしたらいいのか、その遺族にもわからないのです。残念なことに、ご遺骨を供養するというより、どう処置したらいいのか困惑しているのです。



これは決して珍しいことではなく、どこの自治体にも多くの遺骨が保管されていることから容易に推察できます。遺骨の引き取り手がないのです。しかも、その遺骨の数は年々増え続けています。

どうしてこのような縁の薄い遺骨が多くなったのでしょうか？それには時代背景の変化が大きく関係しています。第一次産業が全盛だった頃は親の仕事の後を継ぐ、親と同じ土地で暮らしていく、というように生まれ育った土地で仕事をするのが多く、生活は地元で家族中心で成り立っていました。その土地で暮らしていくわけですから、当然、家族のお墓も近隣のお寺によって代々護られてきました。

時代は流れ、それまでの地域中心の産業から、生活環境の変革により、多くの多岐にわたる仕事が生まれてきました。その仕事をするための会社も増え、利便性から大都市を中心とした企業が多くなったのです。もちろんその会社では効率よく働くことができ、気候に左右される自然中心の産業より、より確実に利益を得られる場所となっていきました。

すると、子供たちは都会に就職するために、地元を後にするようになりました。家族は次第に別々の場所で暮らすようになっていったのです。

地元で暮らしているのは父母のみ、子供たちは都会に出て働き、やがて家族を作ります。そして生まれた子供は孫です。祖父母は遠く離れた両親が育った地元で暮らすことになります。両親と孫は、その後はいわゆる盆暮れ正月に祖父母に会いに行くだけになります。家族関係が年に数回会うだけの、とても寂しい関係になっていきました。これが核家族化、というものです。もちろん、誰が悪いわけではなく、時代の流れというべきでしょう。

そして、さらにその両親の元を子供たちが大学進学、遠方への就職といった具合で両親から離れていくのです。考えてみれば、両親の地元に住む祖父母、両親、その子供がすべて別々に暮らす、という状況になっているのです。離れて暮らしているのですから、子供にあらゆる面で面倒をかけたくない、という気持ちになるのは当然のことでしょう。



日本の子供の出生率の低さが、子供に負担を強いる

厚生労働省によると、2018年に生まれた子供は91万8千人で過去最低を記録。3年連続で100万人を割っています。最も出生数が多かった1949年は269万人ですから、いまや3割強しか生まれていないのです。1世帯の出生率は1.42人で、一人っ子、多くても二人の子供しか生まれません。この子が、これから家のお墓を継承をしていくことは非常に困難であると考えられます。まして学業や就職によって親元を離れ、さらに遠く離れた祖父母の家の墓を継承するなどとは、子供にしてみれば、全く想像すらできないことでしょう。親からみても、子供に自分たちの供養を依存することは避けたいと思うはずです。このような家族関係が、各地でのお墓の継承ができず、無縁化し墓じまいが増えていくことになるのです。それはごく当たり前の流れかもしれません。

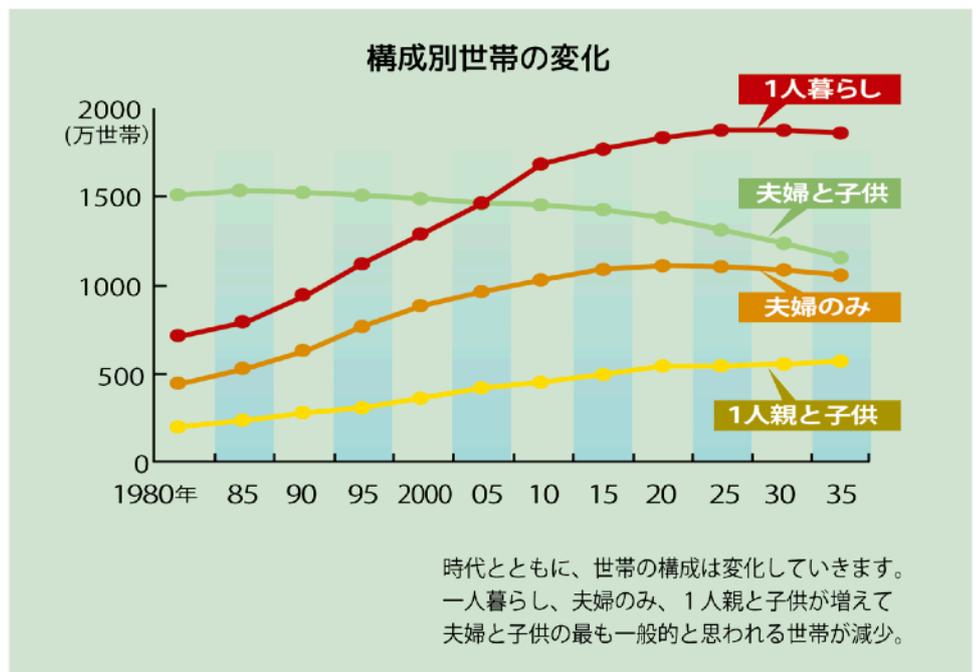
事実、大阪市の管理する霊園では15年間で4000基の無縁墓を撤去し、福岡県久留米市の調査では1531基のうち、なんと850基が無縁化していたということです。

核家族化よりもさらに進む単独世帯化

昔の三世帯家族から、親と子供の世帯へと移行してきた家族像ですが、ここにきてさらに夫婦だけの世帯、夫婦のどちらかが残った単独世帯、未婚や離婚の単独世帯が増加してきました。2025年の推計では、単独世帯は全世帯の36.9%、夫婦だけの世帯は20.7%合わせて57.6%にもなるのです。まさに6割が子供のいない世帯であり、3割強が単独世帯ということになります。この数字は今後さらに増大していくと予想されています。

ここから判断されることは、夫婦の場合どちらか一方が亡くなれば、その人の供養をするのもう一方でしかなく、その時点で単独世帯となり、供養をしながら自身の供養を考えねばならず、世帯数のなかで最も多い単独世帯では、いつ孤独死となって無縁仏になるのか、その不安を抱き続けることとなります。

こうした現実に対して、無縁遺骨の対応には各自治体が困惑しています。無縁墓の進む自治体（東京都や川崎市など）は、6千体、1万2千体の無縁合同墓を作って、無縁墓の撤去後の納骨や、引き取り手のいない無縁遺骨の処理に対応しています。自治体によっては、まだ納骨施設が完備されず、事務所の一室に納骨スペースを作って保管しているところも多くあります。



出生率が低くなったもう一つの要因

単独世帯が多くなってきた要因に、男女ともに未婚率の増加があげられます、2015年の統計では、35～39歳の男性は3人に1人が未婚、女性は4人に1人が未婚です。さらに高齢者の離婚率が上がり、ますます単独世帯が増えています。割合が下がってきた既婚者でも、出産年齢が上がってきたこともあり子供の出産数を押し下げて、全体の出生率が下がってきた原因になっています。

たとえ子供が生まれてきましてでも女兒だけだった場合、一般的にいずれは嫁いで行きます。もちろん嫁いで行くということは家を出て、嫁ぎ先の家に入ることです。したがって実家には、両親だけが残されることになります。

いかにお子様指望まれても、その両親を供養することは困難なのです。

家族にとって家や墓の継承者が少ない、不在という社会的現象は、まさにこうした要因によって形成されたものであると判断されます。

時代は目まぐるしく変わっていきます。明治時代の墓地継承のように、現代においてでも同じようにしたい、ということがいかに難しいことなのかわかります。こうした社会を変えることができない以上、今の時代にあった寺院の対策が求められているのではないのでしょうか？

故人を大切に想うということ

火葬の後、ご遺骨が残されます。本来ならその後の供養はお墓や納骨壇に納骨して供養する、という手立てになるはずですが、前述のように供養しなければならない人との関係が希薄であった場合、ご遺骨をどうすればいいのか？ということになってしまいます。

これは供養ではなく、遺骨の処理ということです。昨今では、そうした要求に対応した、宗教を伴わない新しい供養方法が提案され、そこが受け皿になっています。

葬儀が慌ただしく終わり、ご遺骨が残って、仏事という一連の流れは終わりますが、本来大切なのは、その後の供養や法事（追善）だと思います。この供養や法事こそが、本当は仏縁ではないのでしょうか。



その仏縁を大切に、自身を育ててくれた両親や先祖を偲ぶことが、供養というものではないでしょうか。決して遺骨処理をしてヤレヤレと安堵するのではなく、恩義ある故人を忘れることなく、諦めることなく手を合わせて欲しいものです。そのためには、合祀でも散骨でもなく、故人の供養の対象となる、カタチある存在が必要なのです。

関西に骨仏で有名な寺院があります。そこに参拝しますと「ほれ、あの仏様の中にお爺ちゃんの遺骨が入ってるのよ。手を合わせなさい。」と話す親子の会話が耳に入ってきます。まさにこれがカタチある供養を実感している瞬間ではないでしょうか。また、こういった声も聞くことがあります。

「私は、独り身だ。だから死んだら終わり。なんとか質素でもいいから葬儀だけしてくれればいい。年忌法要は要らないし無理だよ。」しかし、そのような方々が本当に供養を望まれているかと言えば、実はそうではないのです。振り返れば、ご自身はご両親やご先祖の年忌法要をされてきました。家族の中で、たまたま独り身になってしまい、亡くなった瞬間に無縁仏となり、しかも同時にご先祖までが無縁仏となるのです。この家の消滅です。この事態は、大変虚しく避けたい状況です。

たとえ自身が家の最後の独りになり、亡くなることになっても、供養されることが望ましいものです。縁あってこの世に生を受け、愛されて、そして愛してこの世に存在した証を、残してあげたいと思うのです。

この時代に求められる供養とは

家族関係の希薄さ、世帯人数の少数化が「供養」の在り方を大きく変えてしまいました。葬儀は昔ならば真っ先にお寺に相談して、ご住職がご家族をねぎらい勇気付け、近隣の人たちがすぐに駆け付けて、その協力によって執り行われてきました。多くの知人や近親者によって葬儀が行われてきたのです。

現代ではどうでしょう。多くの人は病院で亡くなります。すると病院側からすぐにご遺体の移動を求められます。病院と提携している葬儀社を紹介されることもあります。数時間でご自宅や葬儀社の安置場所に移されます。葬儀社よりこれからの葬儀の進め方を提示され、その中で選択していくようになります。お坊さんはどうされますか？と、仏式葬儀が行われます。最近は直葬という全く宗教の入る余地のない、火葬のみの儀式が年々増えています。葬儀自体の縮小、簡素化が時代の潮流ですが、まさに葬儀さえ行わない流れには、何とか歯止めをかけなければなりません。

時代がスピードを要求し、ご遺体の移動・保全・管理が葬儀社によって一連の作業で処理されていく利便性に、多くの人たちが依存しています。この部分には決して寺院が関与できるものではありませんが、こと供養に関しましては、ご寺院様が本領です。

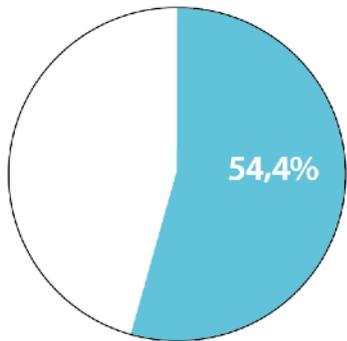
そして逝去後、平均2日から3日で終わる葬儀の後、遺族の手元にはご遺骨が残されます。そのご遺骨を抱えてからは、全くの孤独になるのです。ご遺族がいればまだしも、単独世帯ではその場で無縁仏となってしまいます。当然のことながら、ご遺骨を抱えた遺族には、そのご遺骨をどうするか？という問題に直面します。無縁仏になったご遺骨では自治体のご遺族を探しますが、不明であったり拒否されることが多く、実際は自治体に任せるほかはありません。

ご遺骨を抱えた遺族は、自宅に骨つぼのまま安置して供養を続けるか、何とか別の処置をするしか方法がありません。最近の供養方法に散骨や合祀などがありますが、ご遺族にとっては「それしか方法がなかった。」というのが本音なのです。自宅に安置した場合でも、いつまで続けるのか、続けられるのか、という苦悩も出てきます。安置しているご家族さえも、自身の最後を考えると不安でたまらないのです。手元供養といって様々なオブジェのような可愛い納骨容器が多種販売されていますが、同じことです。

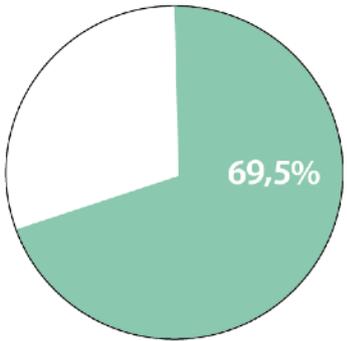
多くの人たちがお寺と関係を持っていません。また墓地を建立するにも、公営墓地は抽選でかなりの競争率です。民営霊園は非常に高額であり、とても建てられるものではありません。しかも毎年の管理費を納めなければ、無縁墓となって撤去されてしまいます。したがって、ご遺骨を抱えた人の選択肢は可能な限りの自宅供養か、散骨か合

祀墓の利用しか残されていません。ですが、69.5%が合祀は避けたいという調査もあります。近年では共同墓とか同じ墓地に入る「墓友」などという言葉まで生まれて、明るいイメージが演出されていますが、この数字が表すように、故人に対して手を合わせたいと思うのが人情です。多くの人たちと一緒に、というよ

り、自分に向けて手を合わせてもらいたい、と考えるのが本来は望まれる供養なのではないでしょうか。しかし合祀墓を選ぶしかないのが現状なのかもしれません。



「お墓の無縁化」の可能性はある。



「合祀」は極力避けたい。

やはり故人を送れるのは仏教だけ



日本で行われる葬儀の78%は仏式といわれています。故人を供養する時は誰でも自然に手を合わせる、というように日本人と仏教と葬儀は結びついています。

冥土の旅、経帷子、六文銭、輪廻転生、三途の川、賽の河原、閻魔大王、地獄、極楽浄土・・・だれもが知っているこうした言葉は、いかに我々の生活に仏教が浸透しているのかよく分かります。読経、お線香、蝋燭、お

りん、これらで葬儀や供養がすぐに頭に浮かびます。あまりにも仏教がごく当たり前に、また正式に故人を送る場面に存在していたわけです。

とはいうものの、葬儀のカタチが近年では様々に形を変えています。ほとんど多くが仏式であるとされてはいますが、実際は葬儀社が仕切る葬儀は仏式を模した形式であり、宗派の正式な荘厳になっていないことがほとんどです。葬儀が終わり、次の葬儀において違う宗派の僧侶が読経したとしても、荘厳は葬儀社の用意したままです。これらのことで最も重要な問題点は、仏教のみ教えがご遺族に伝わりにくいということです。深い仏心をご寺院を通じて、届きにくいことが問題なのです。

現在の葬儀が逝去に直結しており、ご遺体の管理を葬儀社が仕切ったまま葬儀に移行する体制が、お寺と葬儀を乖離させた要因であるといえるでしょう。これでは、ご寺院の存在意義が薄れていくのは、やむを得ないことなのかもしれません。では、このままにしておいていいのでしょうか？本来なら日本人の意識には、仏教と葬儀は深く結びついているものですから、仏教によって故人を送り出すことが、自然な流れであると思われます。お寺であれば、葬儀後に供養の事も相談できますが、葬儀社は葬儀を執り行うのが仕事ですから、その後の供養までは面倒をみられません。民間霊園や合祀墓の紹介くらいに留まっているのが現状です。

しかしながら、一般的に寺院が主体となって葬儀を行なっていることはほとんどなく、葬儀を施行しようとしている方々の選択肢にはありません。その結果、供養の手段さえ見つけられない「供養難民」となっているのです。葬儀の多くが仏式であるにもかかわらず、次第に友人葬とか家族葬などの、故人を送る考え方を排除した個人的な方法で、葬儀を行う人も増えてきました。宗教に捉われない葬儀、とはいうものの供養はどうするのでしょうか？散骨、手元供養、宗旨宗派を問わない霊園く

らいしかありません。そのどれもが問題を抱えています。供養する対象の実態が無い、供養の継承者がいなくなれば家は絶えてしまう、ということです。

日本人にとって、本当に心から安心して供養を続けられるのは、どう考えても仏教しかありません。いつも御仏に見守られている生活の基盤だからです。ご住職様が法要をしてくださるそのお寺にお参りし、御仏に手を合わせて故人を想う。これに勝る供養があるでしょうか。

供養にとって、ご寺院が最善の場所です。お墓をつくるのが困難であり、また供養の継承者がいない昨今では、家も人もこの世に生きてきた足跡を残せないのです。



これからの供養の形を模索する

このように家や家族による供養の継承が困難となり、少子化によって単独世帯が最も多い世帯となってきますと、供養を繋いでいくことはかなり難しい状況です。大切な人の供養を誰がするのか、自分自身の供養を誰がしてくれるのか、いつまでしてくれるのか、この単純な問いに答えが見出せません。合祀なら、遺族の誰かが供養をしてくれるのかもかもしれませんが、それでいいと考える人は少ないのではないのでしょうか。また、それを望んではいません。こうした混迷の中で、海や山への散骨を自然葬として納得し、墓友が集まった共同墓地だと理解し、故人の墓標を樹木に代えてでも、その供養先を探してきました。止むを得ない模索の結果であるといえます。無縁墓地、無縁仏を恐れているのです。極論かもしれませんが、寺院墓地を代々継承していくのは理想の供養であっても、もはや現実的ではないのかもしれませんが、それは、これまで上げてきた数字からも推測できることです。このままでは、供養の継承だけでなく厳粛な供養さえ、希薄なものになってしまいます。

では寺院としては、どのような対応ができればいいのでしょうか？この状況に、ご遺族に代わって供養をできるのは寺院に他なりません。もちろん供養継承者のいない単身者の供養に関しても同様です。ご遺骨も個別に納骨できる環境が必要ではないでしょうか。個別に供養するということが重要なのではないのでしょうか。

この仏具が「常楽塔」です

この寺院による供養を実現するために企画されたものが、個別納骨壇の常楽塔です。

お寺と供養する人を繋ぐことができるのが常楽塔です。供養をお願いする側（一般には檀家様）の状況は、お墓を建立することは予算や継承のことを考えると困難である。普段からお寺様との繋がりが無い。または、菩提寺がない。できることなら遺骨はお寺に納めたい。それも個別の納骨で。そして、これから先の供養もお寺によって行って欲しい、というのが願いではないでしょうか。この願いに応えられることを考え、完成したのが「常楽塔」という納骨お仏具です。常楽塔は分骨を前提とした納骨仏具で底辺10cm角、高さ25cmの小さなお仏具です。供養の継続のために永代供養壇としてご使用頂きます。

分骨式納骨のご提案・・・常楽塔

故人様 お一人に1基のご使用を基本とした新しい考え方の納骨壇です。この常楽塔が、現代の納骨と供養を取り巻く問題を解決することができ、納骨と供養を望まれる方々をご納得させることができます。

この常楽塔を販売した当初は、分骨に対してご抵抗やご批判もいただきました。しかし、初めて導入いただきましたご寺院様に於かれましては、当初の想定を上回るお納骨のお申し込みがありました。お納骨をされた皆さまは「遺骨の量ではなく住職が責任をもって供養してくれる。しかも、形として存在する。それを望んでいたんです。」と形ある永代供養を望まれていたことがわかったのです。これは、現在、永代供養として主流の合祀墓を否定するものではありませんが、やはり、一般の

方々はできれば、形ある供養の姿を求められていたことが示されたのだと思っております。余談になりますが弊社があります京都では、火葬後に自宅に持ち帰るご遺骨は、全ご遺骨の20%程度です。大方は火葬場にて処分されます。もちろん、希望があれば、全骨を持ち帰ることはできますが、ほとんどのご遺族は通例の量のご遺骨の収骨量でご納得されています。ですから理屈の話ですが、この時点で分骨されている訳です。常楽塔では、常楽塔に入るだけの量を分骨していただき、お残骨は、院内の別の場所でご安置保管していただきますので、お持ちになられたご遺骨全ては院内にあることになります。

この常楽塔のもう一つの特徴は、既に納骨壇や墓地をお持ちの方でもご利用いただけるという所です。例えば、墓地が住まいより遠方にあり墓参りが困難な方、将来の絶家をご心配の方などのご供養に不安をお持ちの方々にもご利用いただけます。今までの納骨壇は墓地や納骨壇をお持ちでない方が対象でしたが、この常楽塔は全ての檀信徒様を対象にできるのです。

お寺にとって「常楽塔」とは

お寺様側としての優位性は、常楽塔が小型であるために大きな施設を作らなくてもいいということです。したがって院内で広い場所を必要とせず、当初は少ない基数から始められ、希望が増えれば次第に拡充ができます。寺院の施設として常楽塔は荘厳な環境を作り、寺院の尊厳を構築します。永代供養は寺院側の決めた期間の常楽塔の安置（30年とか）として頂ければ、常楽塔が満杯となって、飽和状態になることもありません。寺院として今後ずっと円滑な運営が可能になっていきます。分骨式のため常楽塔に入らない遺骨は、院内の別の場所に納めて頂くか、ご本山に納骨して頂いてはいかがでしょうか。常楽塔に納まりきらない遺骨が合祀になっても、ご遺族は納得されると思います。本題の「寺院による永代供養」が達成されているからです。永代供養の設定期間が終わったご遺骨も、その方法で合祀となります。境内に合祀墓を建立されることも選択肢の一つです。常楽塔はより多く納骨（供養）を承るために、全骨でなく分骨でご安置できるようにしました。納骨堂（場所）は、分骨ですから占有面積は少なく済みます。しかし、その尊厳は非常に高いものがあります。それは、専用のお仏具で寺院が預かり、住職の責任で供養されるからです。この仏具を使って、寺院が継承が困難になった供養をずっと続けていけるのです。供養の最善の場所が、寺院によって確保されるということになるのです。



常楽塔はたとえ数基であっても荘厳さを保てるように作られていて、多くなればさらにその絢爛さが輝きを増すように企画されています。また一人1基の納骨壇ですので、供養側の事情により常楽塔の移動が起こりましても、その1基だけ外すことができます。現在主流の納骨壇のように解約された場合、次に納骨される方が再利用の場所だと判断して、違和感を持つことはありません。常楽塔はご家族で隣同士への配置希望があっても、すぐに移動が可能です。

このように常楽塔は、これまでにあった納骨壇のデメリットも解消しています。また通常、寺院が納骨壇を始めようとする、最初に納骨堂の建立や数十、数百の納骨壇を並べることになり、多額の費用が必要となっていました。それが数基から始められるこの方法なら、ご住職様の即決によって導入できます。今までの納骨壇では、老朽化するとメンテナンスも大掛かりとなり、多額の費用が必要です。寺院運営にも大きな問題となります。一方常楽塔は仏具としての造作ですから、長期の使用に耐えられます。

万一傷みがでて、その常楽塔だけを入れ替えれば済みますので、負担が少なく簡潔です。

さらに通常の納骨だけでなく、墓じまいやご遺骨の一時預かりにも対応できます。墓じまいによってお墓は消えてしまうものの、お檀家との永年の繋がりを絶たずに、分骨によってお寺にご遺骨を残しておく、という手立てにも利用できます。

利用者にとっても、お寺で個別に永代供養してもらえ、しかも供養の継承者が不在になってもお寺が供養を続けてくれる。これは今の多くの供養難民を救う、お寺の画期的手段となります。



葬儀の話になりますが、現在のように葬儀を葬儀社に任せるのではなく、火葬の後で寺院主導による遺骨での葬儀を推進し、その後の供養として、今回の永代供養をお寺にて円滑に実施できる方法も、私どもではご提案しています。その方法は、常楽塔を永代供養壇としてだけではなく、生前は常楽塔の黒い札に御本尊様を記して頂き、お仏壇としてご使用頂きます。そして、ご家族がお亡くなりになられた時には、この常楽塔をご遺族が火葬場までお持ち頂き、常楽塔に収骨して頂き、御本尊様と共にご自宅までお帰り頂きます。その際の収骨は、常楽塔に納まる分だけ納骨することになります。ご自宅に安置後に、その常楽塔をご寺院に持参して、そこでご遺骨による葬儀を執り行う、ということが出来ます。ご遺族のご要望によって（または生前のご本人の遺志により）、そのまま永代供養（納骨）に移行することも出来ます。こうしてご遺骨によって本格的な葬儀を寺院で実施すれば、ご遺族にとっても大切な人の逝去後、時間に追われず慌てない葬儀となります。また供養場所に戸惑い、右往左往する終活からも解放されます。

常楽塔で達成できる供養のカタチ

分骨式の個別永代供養壇、常楽塔の特長は10cm角、高さ25cmと小型ですが、これまでの墓地供養、納骨壇、位牌による永代供養等とは一線を画して、それまでの方法を超えて、現代の納骨事情に合わせた、これまでにない新たな供養壇です。命名の常楽は、常楽我浄の言葉からご遺骨をお納めする大切なお仏具として常楽塔と名付けました。

常楽塔は、一品一品仏具師が丁寧に作り上げた仏具です。そこに張られた金箔も最高品質のもので、永年の使用にも十分耐えられるものです。塗装も堅牢なものになっています。

運用のシステムとしましては、納骨希望者を募り、ご寺院の設定された冥加金で永代供養をいたします。これまでの例を参考にしますと、30万円から50万円の設定をされているようです。基本的に途中で供養継承者がいなくなること、当初より供養する方が不在などの状況を鑑みて、通常の墓地や納骨壇のように年間管理料を頂かれる例は少ないです。これが安心感を生みます。また永代供養の期間もご寺院で設定して頂きます。こちら30年前後が多いようです。常楽塔は分骨式ですから、常楽塔に納まらない遺骨が出ますので、こちらは院内の別の場所に合祀するか、本山に合祀するようにします。冥加金の設定の際に、将来の院内での、合祀墓建立費用を含んでおられるお寺様もいらっしゃいます。

また、通常の納骨壇使用方法ではなく、墓地継承者が不在となる、あるいは継承者が遠方で暮らすということで墓じまいをされる方にも、常楽塔が活かされます。

墓じまいは実は法律的な改葬手続きがとても煩雑で、移転先の墓地管理者から受入証明書を発行してもらい、今の墓地のある地元の役所から改葬許可申請書をもらいます。現在のお寺から埋蔵証明をもらって、先の受入証明書と改葬許可申請書と一緒に市町村に提出、改葬許可証を発行してもらいます。この改葬許可証を今のお寺に提示し、お墓から遺骨を出すことができます。ですが、墓じまいの後で移したい場所に新たに墓地を建立する例は実は少なく、結果合祀墓に納骨したり、散骨する方が多いようです。



であれば元来の菩提寺の常楽塔に納骨して、そのまま永代供養して頂くことが望ま

しいのではないのでしょうか。この常楽塔は、故人お一人に1基のご使用を原則としておりますが、このような墓じまいに対応される時は、故人お一人に1基ではなく、家単位でお預かりしてもいいのではないのでしょうか。その場合はご遺骨の一片ずつ、または土などを収納して頂くことになります。

常楽塔は、普段は所定の場所に並べられていますが、ご法事や日常の参拝で読経を望まれる家には、常楽塔を本堂へ移し厳かに法要を勤めて頂くこともでき、貴院の格式も上がることになります。何よりも、個別に供養して頂いているという感じが該当家には生まれ、一味違った法要となるのは間違いのないところです。

お寺様の声の一例

「当寺でも、納骨壇運営ができることに。」

普通何百万円もかかる納骨壇とは違い、これなら試しに、という気持ちでポケットマネーで設置してみました。常楽塔を並べると、檀家よりすぐに声があがりました。「これは何ですか？」と。お墓を継げなくなった檀家さんの「お墓は無くなるけれど、永いお付き合いのこのお寺に遺骨を残しておきたいのですが・・・。」という、そういう声にお応えして、この常楽塔を置きました、と説明しました。すると、「よく考えてくれました！ありがとうございます。」「うちもお墓が絶える心配があります。我が家の納骨壇と考えてもいいですか？」さらに「お寺さんが永代供養してくれるなら、これはいいなあ。」とのことでした。その声が檀家に伝わって、あっという間に常楽塔が注目され始めました。

「徐々に拡大していく納骨壇が嬉しい！」

今ある檀家をなんとかしないと・・・。そう考えてこのキットを入れましたが、墓じまいへの対応から納骨壇としての活用に期待できると思い、最初に導入した常楽塔の冥加金を使って、次々に常楽塔を並べました。ネットでお知らせすると、納骨に困っている方からのお問い合わせが多々あり、郵送納骨でも永代供養ができるので遠隔地の方の需要もあります。先代住職も常楽塔を見ておおいに納得。「位牌より安いのに常楽塔の方が立派だな！」とのことでした。

まさに私も同感です。



やっと辿り着いた納骨壇です、現在130基がご利用されています。

恵庭市 曹洞宗 大安寺

住職 押見 俊哉

近年、墓地継承者が居ないための墓じまい、無縁墓となる時代が到来しました。こうした流れは減少する事無く、増大の一途です。檀家からは無縁は困る、それも合祀でなく個別に供養されたい、という意識が強く、寺院として何とかしなくては、と考えるようになりました。そこで、寺院で責任を持ってお納骨と永代供養をさせて頂こうと思いました。しかし一般的な納骨壇では院内に広い場所が必要で、多くの方々の供養にお応えできません。場所を取らずに小さく荘厳な納骨壇はないかと探し続け、やっと常楽塔に辿り着きました。



檀家の想いを実現できたのが、小型の分骨式納骨壇、常楽塔を使った供養でした。すでに納骨壇や墓地を持っている檀家にも、この常楽塔による永代供養が認められ、大きな安心を得て頂いております。家が絶えても当院が永遠に供養を致します。一人一基の個別供養を基本としていますので、ご夫婦で二基依頼された例もあります。この方は大きな安心を多くの人と共有したいと、檀家以外にも紹介してくれています。

常楽塔という分骨式納骨壇を知って随分と悩みました。他にも永代供養が可能な仏具があるのではないかと。でも、結局、常楽塔に行き着きました。この新たな供養に本当に納得しております。



現代の納骨と供養の問題点

それでは、一般の方々は、今、納骨と供養につきましてどのようなお悩みをお持ちなのでしょう
か?核家族化、少子化が囁かれるようになってから、おそらく30年は経つのではないのでしょうか。それ
が要因で、お納骨と供養の環境は激変してしまいました。これは誰が悪いのではなく社会構造(家
族構成)がそのようになってきたためであります。下記が、代表的な問題点ではないでしょうか。

子供たちが独立しました。



代々お護りしてきた大切なお墓や納骨壇。子供たちが独立を
して実家から遠くのところで世帯を持って生活をしている。
代々続いてきたお墓や納骨壇が物理的に継承できなくなって
きてしまった。しかし、今在るのは両親を初めご先祖様のお
陰げ。家も存続する。大切な墓地や納骨壇に変わる供養方法
は無い かとお悩みの方々が増えています。

私たちには、子供がいませんでした。でも、幸せでした。



お子様に恵まれられませんでした。仲睦まじい、幸せな人
生を送られたご夫婦。しかし、やはり伴侶とのお別れの時は
きます。「あなた、先に逝って待っていてね。その内に私も
逝きますよ。」今は、先立たれた方を供養される方はおられ
ます。しかし、残された方もやがてはお浄土へ旅立たれま
す。仲睦まじかったご夫婦の供養はどのようになるのでし
ょうか。

お墓、納骨壇の面倒をどうしよう？



私たち夫婦は、一生懸命に両親、ご先祖の供養を続けてきました。しかし・・・家が継承できない理由は様々です。しかし、ご夫婦を含め、ご先祖が生きてこられた証を残し、長きに渡る供養が保証できれば、どれほど安堵の気持ちができるか。それを実現できる方法があればどうでしょう・・・。

私は、ひとり娘。実家の両親の納骨供養はどうすればいいの？



嫁いでこられました奥様がひとり娘様だった場合、実家のご両親が亡くなれば絶家となってしまいます。その場合の多くは、実家の近隣寺院へ合祀による永代供養をお願いされるのが多いのではないのでしょうか？しかし、納得のいく実家の両親の納骨と供養ができていないのが現実です。ここに「諦めの供養」があります。

もう75歳かあ。独り身だなあ。自身の供養は諦めるか。



生涯独身や、何らかの理由で、独り身の方がおられます。皆さま口を揃えて言われることがあります。「死ねば全てなくなるさ。供養なんていらないよ。」と。しかし、本心でしょうか。一生懸命に働き笑い、泣き、悩み、感動をしてきた人生です。やはり、できれば自身の没後の納骨と供養はしたいものではないでしょうか。

両親には苦勞と心配をかけたなあ・・・特に母親には。



今まで、納骨と供養は長男(実家を継いだ者)が行うものというのが慣習でした。しかし、実家を離れ独立された兄弟姉妹の方でも、身近な所で両親を供養したいと思われている方は案外に多いものです。これは、自然な気持ちです。分骨をしていただき供養ができればどうでしょう。

これらが代表的な納骨と供養の問題点ではないでしょうか。これら全てを解決できる納骨施設は現在はないのではと思っております。これは既存の墓地や納骨壇や樹木葬や散骨を否定している訳ではありません。しかし、残念ながら全てを解決することはできていないのが現状です。もちろん、今までの通り代々継承されていく、墓地や納骨壇もあることは確かです。

隠れたもうひとつの問題

男兄弟二人のご家庭があったとします。一般的には、長男が家を継ぎ、次男は、独立し別のところで生計を立てます。実家から遠くなればなるほど、実家の手継寺との関係も疎遠になってきます。その次男様の家にはお仏壇が無くお寺様との接点は、実家の法事くらいになってしまいます。やがてその次男様のところも不幸がやってきます。次男様がお亡くなられた時の喪主は次男様のお子様です。実家から見ますと孫や甥っ子になります。当然、その頃には実家の祖父母や両親や叔父叔母様も亡くなっている可能性は高いです。そこで起こる問題が実家のお寺がわからない、宗派がわからないということです。これらの事象が「無宗教」と呼ばれるところです。

常楽塔とは何?・・・既存の墓地や納骨壇との違い

これらの全ての問題点を解決できるのが、「常楽塔」という納骨と供養のために製作されたお仏具です。常楽塔は、納骨と供養の視点を納骨者の立場で考えた結果生まれました。常楽塔運営の基本的な考え方は、

1) 故人様お一人に1基のご使用

2) ご夫婦であれば2基必要ということになります。

3) 納骨者と寺院様の間で納骨供養期間のお約束をしていただきます。例えば、納骨後30年ご安置とかです。

4) 常楽塔に収骨しきれなかったお残骨は、院内のどこかで保管をお願いします。(この時点で合祀はしない。)

5) 納骨のお約束の期限が来れば、お残骨と共に院内合祀か本山への合祀で完結して頂きます。

6) 年忌法要などの時は、安置場所より常楽塔を本堂や法要室にご移動をいただきご法要をお勤め頂くことができます。

今までの墓地や納骨壇は「家」が対象でしたが、常楽塔は「個人」を対象にしております。一族であっても個人個人を大切に納骨、供養を行うという考え方です。また、この常楽塔は、墓地や納骨壇をお持ちのお檀家様にもご利用いただけます。墓地が遠方でお参りが困難である、絶家が心配などのご事情の方々にもご利用いただけます。これも大きな常楽塔の特長でもあります、実例でございますが、大型ユニット式納骨壇を100基以上を運営されていますご寺院様が常楽塔の導入を決められ、それに伴い前ページの6つのイラスト入り案内状を全檀家様に郵送されたところ、1ヶ月で25基のお申し込みがありました。これには住職様も驚きでありました。お檀家様のお声は「寺院で、住職の責任に於いて供養してくれるなら申し込みます。」「ここまで檀家のことを考えてくれたのか、ありがたい。」とお声があったそうです。ご住職様も「檀家の供養への悩みがあったんだ。」と仰っていました。

次ページにフロー図を示させていただきます。ご覧いただきますと一目で、今までの墓地や納骨壇との違いがお分かりいただけ、問題解決ができることがご理解賜われるのではと思います。実際にご検討を頂いておりますご寺院様からは、ご納得のお声を頂いております。常楽塔運営のポイントは「寺院様主導の納骨と供養です。」

今は無理だけど

本来は納骨/供養に望むこと

自身(親族)の供養を途切れさせたくない
供養は民営ではなく寺院が望ましい
無縁仏にはなりたくない
遺骨を個別に供養して欲しい

これから求められる

寺院として納骨/供養に出来ること

自身(親族)の供養を寺院が実施する
本来は寺院が供養に対する専任である
ずっと寺院のもとで永代供養をする
合祀せずに個人単位で供養する



この要望が達成できれば

現在の檀家からも、広く一般からもご貴院に
納骨、永代供養を求める要望が到達します。

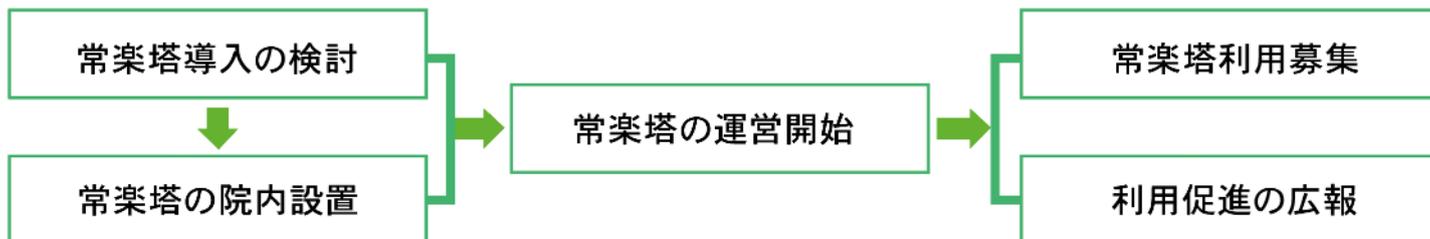
しかも初期投資は最低限で始められ、
院内の省スペースで導入可能、

投資対効果は破格です。必要な広報活動も万全のご支援。

すでに

導入され、成功されているご寺院をこのBookでご紹介。

最新の「常楽塔供養」を全てご案内しています。



これより、時代に適合した常楽塔の立ち位置、その具体的な導入方法をご案内してまいります。

現状

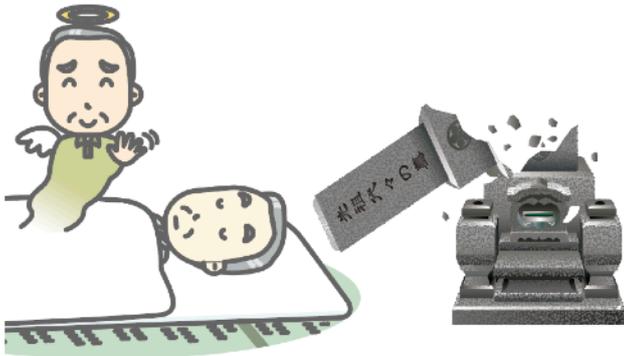
家が中心で推進する現在の供養



墓地、納骨壇以外では供養の対象は無くなります。



「家」として、故人の供養を家長が引き継ぎます。



継承者が亡くなると、その瞬間に自身、ご先祖も無縁仏になります。

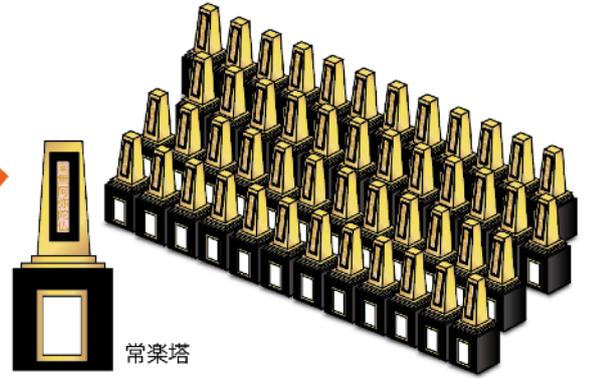


一人娘が嫁いだり、親族が遠方、一人暮らしでは…

常楽塔

寺院による常楽塔という新しい供養

供養はどこで？



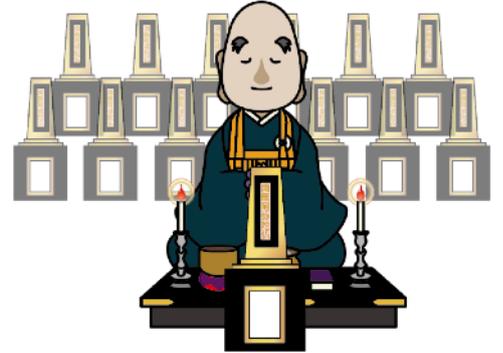
ご供養の対象は、一人1基で個別に存在し続けます。

誰が供養する？



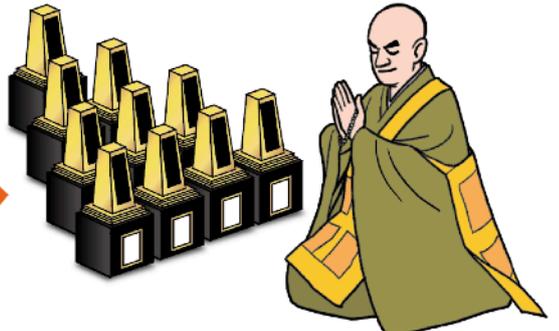
「寺院」が責任を持って故人の供養を引き継ぎます。

継承できない？



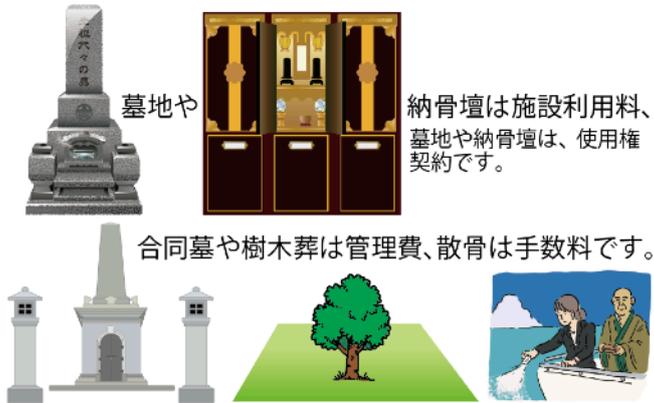
無縁仏にはならず、寺院が供養を続けていきます。

供養は無理だ。



実家の親も、一人暮らしの人でも受け入れて頂けます。

現状

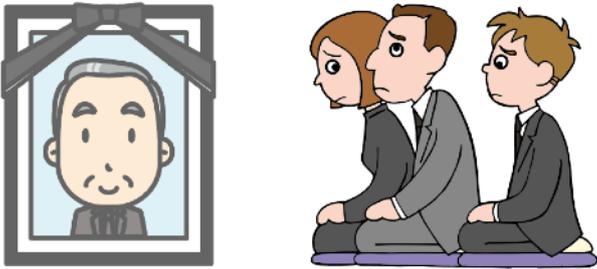


供養料の内容は。

常楽塔



常楽塔への納骨+30~50年の永代供養料です。
常楽の供養の永代供養料や供養期間は、各ご寺院により異なります。



供養の継承が続く限り、墓地や納骨壇に故人が眠り、
合同墓や樹木葬、散骨では礼拝の対象がありません。

故人に礼拝を。



永代供養の期間30~50年間、故人はいつでもここに。

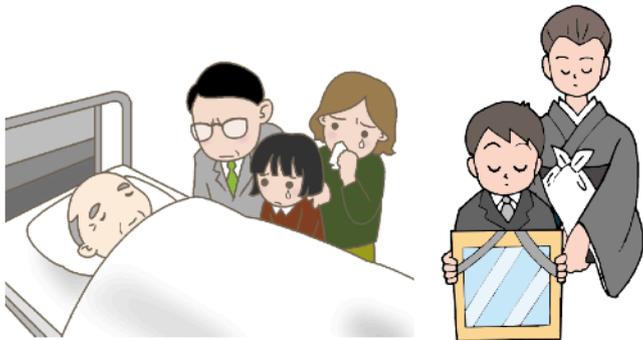


墓地は屋外であり、閑静な場所がほとんどです。

供養の環境は？

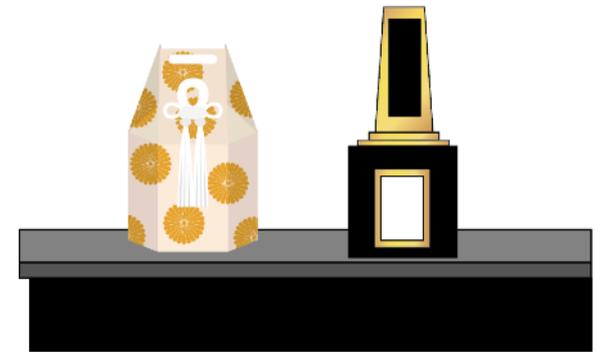


いつも住職の目が行き届く、院内にご安置されます。



万一の時に供養場所がない、ご遺骨が自宅に安置、
霊園や納骨壇探しの苦労が、重くのしかかります。
安価な公営墓地は倍率も高く生前予約不可です。

すぐに供養対応。



常楽塔供養でしたら、設置寺院が即応を致します。
以前の宗派を問わず、郵送納骨にも対応致します。
生前予約でご自身や親族の供養の場を確保できます。

現状



全骨、分骨は関係なく、墓地や納骨堂に納骨され、継承が続く限り安置されます。継承が途絶えると、墓地や納骨壇からご遺骨は撤去され合祀されます。

常楽塔



常楽塔に分骨されます。お残骨は院内にご安置され、常楽塔での供養期間の満了をもって、院内または本山に合祀。供養期間が長く、その後も形を変えて供養が継続。

納骨の方法は？

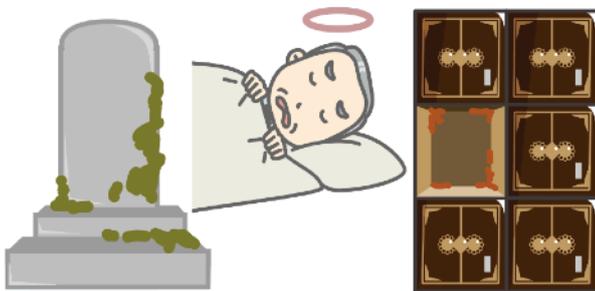


近年は寺院との関係が薄い方が増え、公募する霊園や納骨壇、樹木葬や散骨、合同墓に依頼するしかありません。

寺院との連絡？

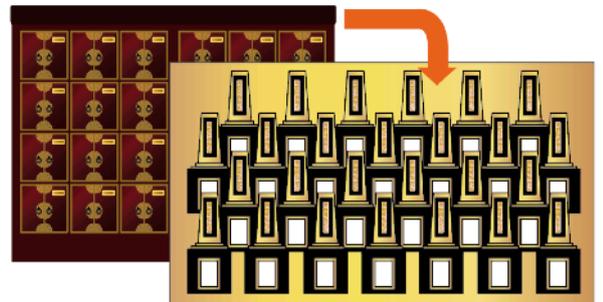


供養は専門家であるご寺院にお願いしたいもの。「常楽の縁」(入会無料)が、ご寺院をご紹介します。



墓地や納骨壇には継承者の不在による「墓じまい」が頻発、供養を継続するために常楽塔との併用も。

現有の墓地や納骨壇との併用

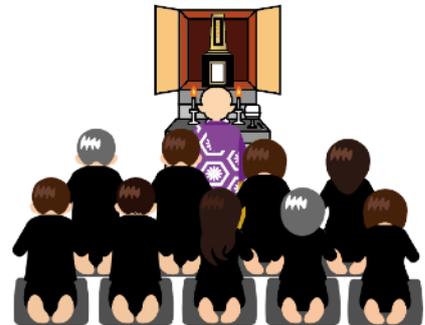


常楽塔は寺院による永代供養のため、墓地や納骨壇で供養を続けられない場合は、こちらで継承します。



不幸があった場合、すぐに火葬・葬儀を実施するのが当然のようになってきました。したがって寺院ではなく、葬儀社が主体となって葬儀を行うのが慣例です。

常楽塔は葬儀でも運用



火葬を終えて、常楽塔に納骨。後日「常楽の縁」が、葬儀可能な寺院をご紹介します。余裕をもって日程を決め常楽塔で葬儀を実施。寺院主導で宗派の正式な葬儀が行われます。ご希望があれば、引き続きお納骨も可能です。

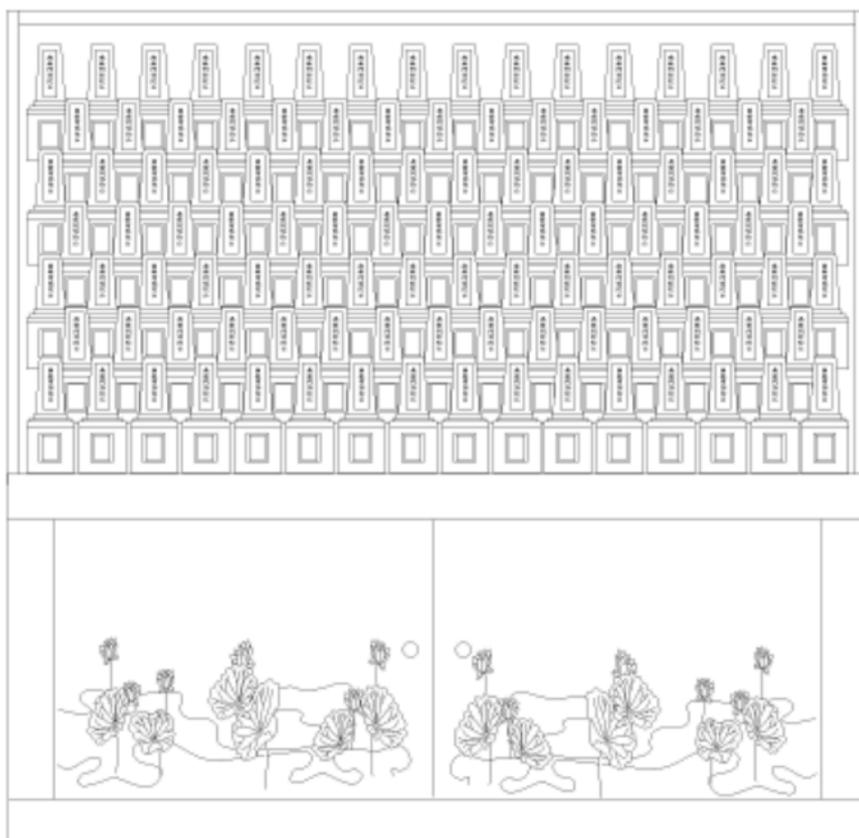
常楽塔の設置

いかがでしたでしょうか。常楽塔の優位性がご理解賜われたのではと思っております。常楽塔は、現在主流となっています。ユニット式納骨壇と同じく、本格的な納骨堂運営も可能です。また、政令指定都市に於ましても納骨堂運営許可が降りております。ご安心してご採用いただけます。

常楽塔の設置、運営までの流れの一例を示します。

① 設置場所の決定 小スペースで本格的な納骨堂運営が可能です。

常楽塔は、小スペースでも本格的な納骨堂運営が開始できます。畳1枚のスペース(180cm×90cm)があれば最大124基の設置が可能です。124故人分です。家単位数で考えますと最大58軒分は確保できます。(算出根拠は、総務省の統計発表の1世帯あたり人口数2.14人に基づく。)1軒3名としましても畳1枚のスペースで少なくとも40軒の納骨スペースが確保できるのです。お檀家様の中には、既に墓地や納骨壇をお持ちの方もおられると思いますので、第一期の納骨堂運営としては、十分な数量かと思えます。また、常楽塔は最初に最大基数を配置していただくなくても大丈夫です。例えば、120基設置できる壇に30基設置から運営を始めていただくという状況を見ながらの分割設置でも納骨供養の機能は発揮されます。また、今までのような納骨堂を建立するなども必要がありませんので、将来の建物の維持経費を積み立てるなどのご心配も少なくなります。



設置一例

② 納骨供養期間をお決めください。

常楽塔は、安置期間を定めていただいております。これは、納骨されてから30年とか50年など、その故人の常楽塔の安置期間を定めるということです。約束された期間は常楽塔で、期限が過ぎれば院内の合祀墓で継続供養という考え方を基本としております。この期間については、様々な考え方があります。現在の墓地や納骨壇は、継承者が居なくなれば、閉鎖でき次の希望者に使用していただけます。極論ですが、この継承者不在は、墓地や納骨壇の使用後1年かも30年かも知れません。未知数です。しかし、常楽塔は絶家になり継承者が不在であってお約束の期間はご安置いただくこととなります。常楽塔の回転率は、定められた期間満了後に初めて回転するということとなります。期間を定めていただいている理由は、納骨者の感情を考えたからです。納骨者の一番の心配は、自身や先祖の遺骨の行き着くところと供養です。独り身の方や最終継承者が亡くなり絶家となれば、その瞬間に自身も先祖も無縁仏になってしまいます。悲しく虚しいことです。しかし、常楽塔の場合は、立場に関係なく没後から納骨供養が始まります。例え、絶家になってもです。また、生前に予約されれば、自身やご先祖の安眠の場所も確認できます。期限を定めることで「安心感」を与られます。この安心感が常楽塔が一般の方々から支持される理由だと思っております。可能であれば常楽塔をお申し込みになられた時に生前法名や戒名を授けられると、なおよいのではないのでしょうか。

③ 常楽塔を安置する空間のデザインの検討

常楽塔だけでなく周辺の荘厳も考える必要があります。常楽塔が、どれだけ素晴らしい空間に安置され「永眠するに相応しい場所」と思っただけが必要が必要です。こちらは、設置をお考え頂いているお場所を拝見させていただき、弊社で設計ご提案をさせて頂きイラスト化させて頂きます。そして、お見積もりをさせていただき、総工事費を決定して頂きます。この総工事費の決定は、常楽塔の1基あたりの冥加金 決定に必要となります。



④ 冥加金(納骨供養料)決定

常楽塔の冥加金の構成は、

- ① 総工事費用
- ②. 当初の告知経費(常楽塔告知のパンフレットやホームページ作成費用など)
- ③ 合祀墓造営費(納骨期間満了後に必要となる合祀経費です。)となります。下記に実例を記させていただきます。

【実例】 50年間の永代供養

常楽塔を安置する場所寸法 横幅360cm、高さ300cm 奥行30cm まさに畳2枚です。

- | | |
|----------------------|------------|
| ① 常楽塔設置総工事費 224基安置可能 | ¥9,050,000 |
| ② 当初の告知経費 | ¥700,000 |
| ③ 合祀墓造営費 | ¥1,000,000 |

で合計10,650,000円と定め考えていきました。

この総工事費を単純に総設置基数で割りますと $10,750,000円 \div 224基 = ¥47,991$ となります。これに寺院様の冥加金を足して頂きます。仮に冥加金が30万円としますと $47,991円 + 30万円 = 約35万円$ となります。これが、冥加金を決定する目安となります。ここでご注意頂きたいことが合祀墓の扱いです。この合祀墓は当初よりご用意いただく必要はありません。極論ですが、設置後の50年先にご用意して頂ければよく、立派な物は必要はないかと思えます。1基ご契約いただく度に $100万円 \div 224基 = 約4,500円$ の積み立てをしていただく感覚でいいのです。この事例で、224基全てがご契約になった時は

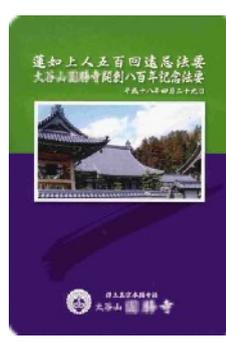
※ 総常楽塔冥加金350,000円 × 224基 - 総工事費10,750,000円 = 67,650,000円の差額が生まれるのです。 この事例では、当初より10,750,000円をご用意されておられません。また、常楽塔も50基から始められましたので 当初の常楽塔設置費用は460万円でした。これには、告知経費の70万円が含まれております。実際には、この告知経費も一度に70万円を投資された訳ではありません。必要な物から順に準備されました。

⑤ 当初の活動

仮に前例の予算450万円で納骨堂運営を開始したといたします。この金額は、ご寺院様のある意味投資となりますので早期の回収を考える必要があります。この実例ですと460万円 ÷ 35万円 = 13基のお申し込みを頂ければ回収できることとなります。ただ、次の常楽塔の購入がありますので、その費用捻出も考えますと20基程度のお申し込みは必要 となります。この実例のご寺院様では、常楽塔を製作している期間にパンフレットを製作され、全ての檀家様に郵送されました。結果は設置前に28基のお申し込みがあり、早期の資金回収ができました。

いくら良い施設を作られましても、広報いわゆる告知を行わなくては情報は伝わりません。弊社では、寺院戦略に特化した販売促進の専任スタッフがおりますので、チラシやパンフレット、ホームページ制作などのお手伝いもさせて頂いております。

また、運営をされます寺院様の中には、お檀家様以外（宗旨宗派関係なく）へのお申し込みを考えられています寺院様もおられます。その寺院様は、新聞折り込みチラシなどの販促戦略を試みられている場合もあります。そのような時にご協力はさせていただきますので、お申し付けください。



常楽塔の導入をお勧めします

ご案内のように「常楽塔」は、これまでの納骨壇の概念を覆して、本当に供養に困っている方々の要求に応えられる永代供養の納骨壇です。寺院にお一人お一人の供養の場を作り、たとえ供養の継承者が不在になっても、お寺様が後を継いで供養をしてくださるといふ、この上ない安心に満ちた「寺院供養」実現のために生まれたものです。前述ページのイラストにあるような、苦境に立たされた供養への問題を、常楽塔による寺院供養によって解決することができます。寺院墓地でもなく、納骨堂でもなく、合祀でもなく、今、寺院に求められる新たな供養の形は、これまでの伝統的供養から一歩踏み出したようにも見えます。しかし、確実に現在の供養に対応し推進するものです。ぜひ導入をご検討ください。

常楽塔が埋もれることのないように

常楽塔の導入から個別の永代供養が始まりますが、それだけでは多くのお申し込みを頂くことは難しいです。情報が伝わらなければ誰の意識にも届かず、存在しないものになってしまうからです。今回、納骨壇キットに販促ツールのポスターやチラシをセットしているのも、その点を重視したからです。世の中のほとんどの企業が販売促進に邁進しています。せっかく優れた製品を作っても、そのユーザーメリットを広報しなければお客様から買って頂くことは不可能です。昨今のように情報が過多になっている時代、ユーザー心理を理解して、的確な販売促進を進めていくことが不可欠です。ご貴院の広報も含めて、現在お伝えしたい情報がありましたら、いつでもお声をかけてください。

こんな供養があったんだ！



常楽塔の安置場所

常楽塔は小型ですが納骨壇です。檀家様がお参りされる事を念頭に場所の選定をします。しかし、納骨壇キットで導入されました時点では9基とコンパクトですので、以下の例をご参考にしてください。

① 内陣の脇壇や脇間（次頁の写真をご覧ください）

内陣の脇壇（余間）や脇間に安置されますと荘厳性は高いですが、お檀家様が常楽塔の前で参詣ができないこととなりますので、外陣から参詣できる準備が必要です。

② 納骨壇（次頁の写真）

納骨堂の御本尊がご安置されています仏壇部分など、小さなスペースをお作りください。また、既存の納骨壇を一時的な常楽塔の安置場所に転用も可能です。

③ 位牌堂や経堂など諸堂の活用（次頁の写真）

位牌堂の場合は、位牌を安置されています、ひな段の奥行きが11cm以上確保できるのであればその段に安置していただくのも一案です。

④ 院内で比較的利用度の少ない場所や部屋（次頁の写真）

例えば、押入れを改造するなど利用の頻度が低い部屋を有効利用します。将来の納骨堂や永代供養堂へと昇華させることができます。

どうしたらいいだろう？





① 内陣の脇壇や脇間



② 納骨壇



③ 位牌堂や経堂など諸堂の活用



④ 院内で比較的利用度の少ない場所や部屋



納骨につきて

常楽塔の納骨分に、直接遺骨をお入れ頂いても何ら問題はありませんが、別途桐箱を用意して、お納骨されることが多いようです。



常楽塔および雛壇のメンテナンス

- ① 常楽塔の金箔部分には、金箔が汚れる事を防止するためにコーティングが施されていますので、埃を払う程度で大丈夫です。万が一、汚れがついた場合は硬く絞った柔らかい布で水拭きしてください。
- ② 納骨部の黒塗りの部分は、基本は乾拭き対応となります。汚れがついた場合は、金箔部分と同様のお手入れをお願いします。
- ③ ひな壇は、乾拭きまたは水拭きで対応してください。

YouTubeで、常楽塔のイメージ動画を配信しています。画面をクリックしてください。



結果として常楽塔というシステムは

① 畳1枚からのスペースで本格的な納骨運営が可能です。

- ・一般的な納骨堂運営が可能です。
- ・絶家や独り身に方々にも満足度高い永代供養のご提供が可能になります。
- ・故人お一人に1基の形ある納骨を実現できます。

② 初期費用が大幅に抑えられます。

- ・約30万円から本格的納骨運営が始められます。
- ・当初より、立派な納骨堂は不要です。

③ 高いリターンが得られます。

- ・納骨者から高い評価が得られています。
- ・初期投資が少ないため、寺院運営の一助となる高い資金リターンが得られます。

④ 広報サポートが充実しています。

- ・常楽塔を熟知した弊社スタッフによる広報サポートが受けられます。
パンフレットやホームページ制作などは、有料となります。
- ・弊社運営の「常楽の縁」による納骨希望者の紹介システムがご利用いただけます。

現在の常楽塔1基の単価です。ご指定の院内スペースに合わせて、ご希望の供養環境の構築に合わせて、常楽塔の設置基数をお決めいただけます。当初は少ない基数から始められて、状況に合わせて増やしていくことも可能です。

常楽塔の価格 (1基単価) 税込価格

漆塗り仕上げ	カシュー塗り仕上げ
1基～9基	
47,950円	34,500円
10基～29基	
43,200円	31,000円
30基～	
38,370円	27,600円

■ 常楽塔：仕様

木製、上部モニュメント純金箔押し、下部収骨箱黒塗り、
国産製品、巾10cm 入り10cm 総高さ25cm
30基以上でしたら、オリジナル常楽塔も製作致します。

おわりに

このご紹介させて頂きました「常楽塔」は、最善でないかも知れません。もっといい永代供養の方法があるかも知れません。しかし、今の段階では手前味噌になりますが自信を持って「最善」と思っております。常楽塔をお求め頂きました寺院様が、「本当に常楽塔いいのか?」という疑問を持たれ、幾度もの冷静に考えられました。しかし、いくら考えても行き着くのが、「常楽塔」だったとお話を頂いたこともあります。また、ある寺院様では、この常楽塔による永代供養の話をご檀家にお話をされたところ、檀家様が納得されて涙ぐまれたこともあったとお聞きしました。

過日、お取引先の寺院様からのご依頼で、お仏壇の廃棄処分にお檀家様のお宅へ寄せて頂きました。85歳の高齢のお婆さんの一人住まいでした。施設に入居されるためのお仏壇の処理でした。その時に、ご友人がお二人立ち合われていました。その中のお一人が、私に「名刺をください。」と。理由を尋ねますと、同じく近い将来にお仏壇を廃棄処分しなくてはならないとのことでした。そして、続けられましたのが「私の葬儀と納骨はどうなるのかね。」でした。その目は、本当にお寂しい目をされていました。今、ご自身の葬儀、お納骨、そして、その後の永代供養に悩まれている方は、多く居られるのが現状ではないでしょうか。その解決策の一つとして「常楽塔」による納骨堂運営をお考え頂ければの願いで、本書を作成いたしました。前ページでご紹介の「常楽の縁」では、お葬儀の企画もさせて頂いております。

今、常楽塔の導入をお考え頂ければ、
ありがたく幸いです。

合掌



参考資料【常樂塔納品事例写真】

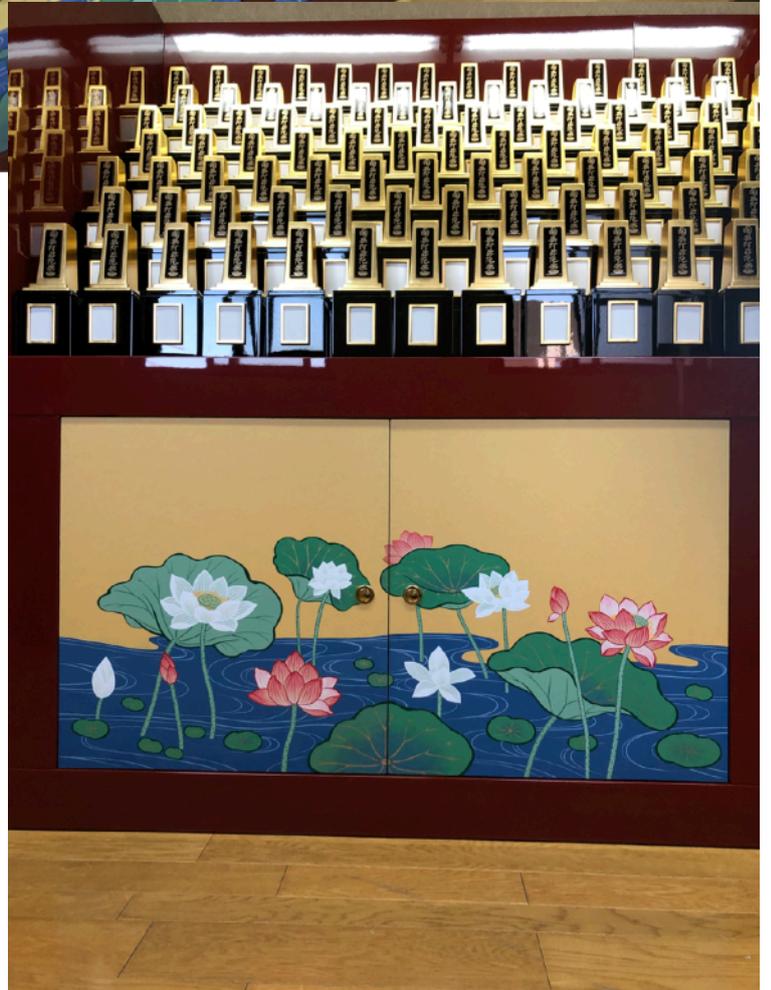
愛知県 臨濟宗寺院



北海道 曹洞宗寺院



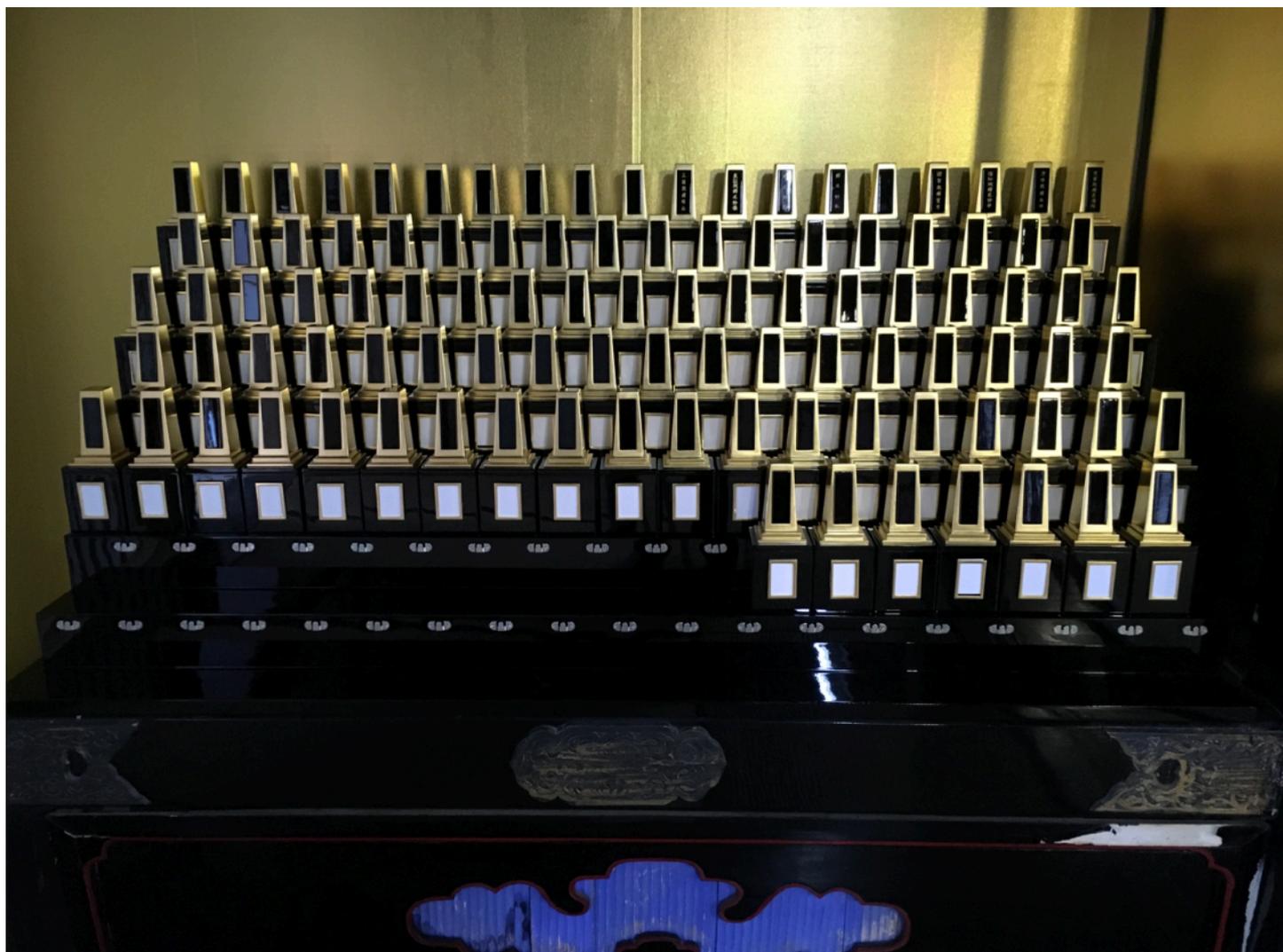
大阪市 浄土宗寺院



広島県 臨濟宗寺院



愛知県 真宗大谷派寺院



この供養の形をご寺院にお伝えしたい。

常楽塔や仏具に関することなら

メールで info@yuishinan.co.jp

フリーダイヤルで ☎ 0120-121-279

有限会社
京都唯心庵 京都市下京区中堂寺藪ノ内町 19 番地

常楽塔やご寺院の販促ならなんでも

メールで ask-ad@mx5.nisiq.net

直接お電話で **053-473-2468**

ASK ADVERTISING Inc.,
寺院販促部：静岡県浜松市中区城北 3-3-34

この供養の形をご寺院にお伝えしたい

本書の収録内容の無断転載・複写・引用等は禁止されております。

編集/アスクアドバタイジング有限会社

デザイン/川村 守弘

コピーライティング/川村 守弘

発行人/山田 富美男

発行元/有限会社 京都 唯心庵



寺院用お仏具 納骨壇
寺院専門アシスト・ワークス **京都唯心庵**
本社：京都市下京区中堂寺藪ノ内町 19 番地

ご寺院アシスト HOT LINE ☎ **0120-121-279**

<http://yuishinan.co.jp>